「測量試み」と「経費自己支出」の条件で始まった伊能忠敬の全国測量も、幕府に対し、「日本東半部沿海地図」を文化元年（一八〇四）八月一日に提出、十一代将軍家斉の閲覧によって正確さと美しさが認められたことで実を結んだ。

忠敬は第四次測量後、農業―浪人の身分から小普請組に登用され、測量も幕府直轄、経費全額支給となった。責任を感じた忠敬は、五次からは隊員に旅先での心得を記した起請文（宣誓文）を示し、それに血判を押させ、万全の態勢で臨んだ。

東海道から紀伊半島へと測進した一行は、海岸線の屈曲や激しい波、

潮音―風声

佐久間達夫

酷暑に悩まされた。須賀利浦（現・三重県尾鷲市）測量のころから病人が続出した。京都から測量隊員増員の要請をしたが、瀬戸内海の四百余の島々の測量で再び病人が出た。

忠敬も、文化三年（一八〇六）四月末日に秋穂村（現・山口県秋穂町）で瘧（マラリヤ）にかかり、七月末の松江城下までの測量は隊員と別行動をとった。そのため、隊員の中には宿で酒宴を開き、献立内容に文句を言う者などが出て、このことが幕府天文方の耳に入った。忠敬は親戚で内弟子の平山郡蔵と小坂寛平を破門にし、二男の伊能秀蔵、内弟子の門倉隼太、尾形顕次郎を謹慎にして問題の解決を図った。

大事業の陰に

同年十二月十六日、雪の降る卓朝、破門されて江戸深川黒江町の地図御用所を後にして郷里へ旅立った郡蔵と寛平。一方、伊能家に婿養子に入った時や全国測量の時、物心両面の援助を受けた家の子供を破門せねばならなかった忠敬。三人の胸のうちはどんなだっただろうか。実測による日本地図完成という大事業の陰に、こうした悲しい出来事が隠されている。（元伊能忠敬記念館長）

◇

今回で佐久間達夫氏のシリーズは終わります。次回からは大阪産業大学教授の桂川光正氏が担当します。